



# 国際機関は 世界の縮図のような存在。 人道支援の最前線を まさに肌で感じています。



UNICEF(国際連合児童基金) ニューヨーク本部

今井 啓示 Keishi IMAI

外資系一般事業会社勤務を経て、2010年にあらた監査法人(現 PwCあらた有限責任監査法人)に入所。テクノロジー業界を中心に、国内外の上場企業やIPO準備企業への監査業務やアドバイザー業務を担当した後、外務省本省の特定任期付職員として採用され、外部専門家として世界中の日本の在外公館に対する査察業務及び本省での監察業務に従事。任期満了後オーストラリアに留学し修士号を取得。ほぼ同時期にUNICEF(国連児童基金)の空席公募にて内部監査ポジションのオファーを受領し、現在はUNICEFニューヨーク本部にてアフリカや中東、東南アジアなどのUNICEF国事務所に対する内部監査業務を担当。2015年には日本公認会計士協会東京会非営利法人委員会の委員を務める。

子どもの頃から海外生活に憧れ、中学時代の夏休みのホームステイが国際機関で働くことの原体験になったという今井啓示さん。外資系企業への就職から会計士資格取得、外務省での監査業務を経て、現在のUNICEFでの仕事に至った経緯や思いについて伺いました。

## 公認会計士を目指した きっかけ

—自己紹介と公認会計士を目指されたきっかけを教えてください。また、会計士になってよかったと思う瞬間についてもお聞かせください。

私は子どもの頃から星空が大好きで、受験勉強などで疲れた時は、決まって自宅から見える星空を眺めていました。その影響もあって、子どもの頃の夢は研究者になることで、宇宙の謎を解明したいと考えていました。実際、大学では物理学を専攻したものの、あまりにも難しく、その道で生きていくのは無理だと早々に諦めてしまい、代わりに文系学生と一緒にサークルに没頭する生活を送っていました。就職活動の時期が近づいてくると、理系学生は大学院進学が当然という雰囲気の中、私は一般企

業への就職に向け就職活動をし、無事内定をいただくことができました。それまでは会計士がどんな仕事かも知らず、難関国家資格という程度の知識しかありませんでしたが、入社までに日商簿記2級の取得を勧められ、それをきっかけに会計の世界に興味を持ちました。至って普通の学生生活を満喫しており、目立った特徴や経験はありませんでしたが、日本の大手企業ではなく、当時まだ日本では名前も知れ渡っていない外資系の一般企業に就職したことが、少し違った選択をしたということになるかもしれません。そこで本社から駐在で来ている外国人と一緒に働く中で垣間見られた彼ら・彼女らの仕事に対する情熱やビジネスセンスに自分の無力さを痛感したことは、今でも覚えています。それが国際的な環境で仕事をするための最初の一步となりました。

外資系企業に入社した時点で、将来は転職を繰り返しながら自分のキャリアを作っていくのだろうと考えていたものの、いざ入社してみると「これが自分の強み」と言えるものがなく、時間だけが過ぎていくことに相当不安を感じていました。学生の頃とは違い社会に出るとテストなどは存在せず、自分以外の誰かの役に立って初めて周囲から認められるという環境のギャップにも悩み、そこで改めて「自分はど

ういった分野でどんな強みを武器に今後キャリア形成をしたいのか」と真剣に悩みました。結果「何かしら資格を保有していることで専門知識・貢献の場が増え、かつ強みを客観的に証明できる」という考えに至り、簿記2級に合格後も1級を目指して勉強を続けていたことや理系ならではの論理的思考、数字に強いこと、組織経営にも関心があったことから、最終的に会計士資格を目指そうと決心しました。

これらの点は現在も活かされており、組織経営全体に係る点では、全体を俯瞰してみた時に問題点を重要性に応じて組織をマクロ的にもミクロ的にも議論できる点は、一般企業での業務との対比で、監査人としてのやりがいに繋がっており、また、今後のキャリアを考える上で様々な選択肢を与えてくれています。数字に対する強みは、現在UNICEFの内部監査室では監査業務にデータ分析の要素をより深く浸透させたり、業務の効率化や自動化を加速させることに役立っています。自身も数名の主要プロジェクトメンバーの1人として深く関与しており、同僚の中でも「データ分析に強い監査人」として認識されていると思います。会計士、特に監査業務に携わる人間として、日々の業務はクライアントへの付加価値提供が大前提ですが、多くの監査人が経験するように、クライアントとの意見の対立等で

仕事が思うように進まないことの方が一般的で苦勞することも多いです。それでも、振り返ってみると、あの時監査人として言うべきことを言って良かった、クライアントとの共通の落とし所を見つけ結果として組織に、ひいては世界中の子ども達の笑顔に貢献できて良かったと思える瞬間は、毎日の苦勞を帳消しにし、監査人としての仕事にやりがいを感じる事が出来ます。また、この醍醐味を味わえるのは、公認会計士にのみ与えられた特権だとも思っています。

#### 一 監査法人に入所されてからのお仕事についてお話しいただけますか。

2010年に現在のPwCあらた有限責任監査法人に入所しました。大学で物理学を勉強し、新卒で入社した会社で半導体関連に携わったことから、特にテクノロジー業界に関心が深かったので、その業界のクライアントを担当する監査部門を希望し、その通り配属していただきました。合計で5年超PwCに在籍しましたが、規模も大小様々、かつ種類も国内・外資系企業と本当に多くのクライアントの監査業務を経験できました。監査の計画から実行・完了まで、決められた一連の監査手続を体得すると共に、監査人の心構えや監査品質の追求、チームマネジメントといった、監査人として備えるべき全ての要素を叩き込むことができたと思います。お世辞を抜きに、ここで身に着けた監査人としての基礎は現在も仕事の隅々で活かされており、UNICEFに入って初めての国事務所監査で調書レビューの際、上司から“*He is a real professional*”とっていただけしたことは、日本で身に着けた監査に対する知識や経験が世界でも十分に通用することを証明していると自信を持って言えます。

正直、監査法人に在籍していた頃は仕事量や期日遵守、様々なレベル・立場の方々による日々のレビュー等でプレッシャーに押し潰されそうでしたが、結果としてその経験が今の自信に繋がっており、大変厳格なパートナーやインチャージの方から「監査品質には一切妥協をしない」という姿勢を学べたことは、監査人として

の修行だったと思っています。決算数値の妥当性をクライアントのビジネスと絡めて納得するまで追い求めていく姿勢こそが“データ分析に強い監査人”としての道を拓いてくれたのだと思います。

#### 一 海外を目指されたきっかけを教えてください。

子どもの頃からのいろいろな要素や経験が積もって「海外で働いてみたい」と思うようになりました。その1つが小さい頃から通っていた地元の英会話教室です。ここで英語の発音や大勢の前でスピーチをするといった訓練をしたことで英語に自信が付き、「いつか海外で生活してみたい、働いてみたい」と思うようになりました。また、中学1年生の夏休みにアメリカでホームステイした時、バスでメキシコに行ったのですが、国境を越えた途端にいわゆるストリート・チルドレンに遭遇し、1人の子どもにお金をあげようとしたら、他の子ども達も同様にお金を頂戴と懇願してきたことがありました。その光景は、今でも鮮明に記憶に残っていて、貧困問題について考えるきっかけにもなり、現在のUNICEFでの仕事にも文脈としてつながっている気がします。

国際機関を目指す決定的なきっかけとなったのは、外務省での監査業務です。外

務省で最初に査察に訪れた国が世界最貧国の1つと言っても過言ではない、マラウイというアフリカの国でした。マラウイに対して往査前は貧困や犯罪といったネガティブなイメージを持っており、現地に降り立った際の印象は、テレビで見ると一面広大な平地が続き、お世辞にも綺麗とは言えない家々が並ぶ典型的なアフリカの国、といったものでした。しかし、現地で出会った方々のたくさんの笑顔や毎日を生き生きと暮らしていることを肌で感じることで、自分が仕事であれこれ悩んでいるのが馬鹿らしく思うようなことさえありました。その一例が、滞在中、日本で不用となった靴を現地の子供達に寄贈するというプロジェクトで、その靴を履いた子供達と5kmのfun runを行うイベントです。これは現地で靴を履く文化・習慣がない人々に対し、足裏を通して感染し、最悪の場合死に至る感染症を防ぐ目的で行われたものですが、走りながら靴で大はしゃぎしている子供達だけでなく、見ている大人達も興味津々で終始笑顔に包まれたイベントとなりました。このような今まで日本で経験することができなかった世界の実情を、まさに肌で感じる事ができた体験がもととなり、海外、特に国際機関で働いてみたいと、強く思うようになりました。





—実際に海外に行かれて大変だったこととその内容を教えてください。

当初、仕事の進め方には戸惑いました。日本の現場では、チームで問題点や疑問点などをすぐに共有し解決に向け全体でアクションを起こしていくイメージですが、アメリカでは個人の裁量に大きく委ねられています。チームで共有というよりは自身で事前に報告事項にするか否か、する場合はどういった文面で報告するかなどを論理的に組み立てた上でドラフト文書を作成し始め、本格的なチーム全体でのディスカッションは、個々人の報告事項を合体させるタイミングで行われます。もちろん、最低限のアップデートは随時チーム内で行われますが、日本より希薄です。

これは、海外での就職、とりわけ国際機関での仕事は、事前に仕事内容が定まっている特定のポジションに応募し、オファーをもらうという慣習に起因すると考えられます。採用される人は、その道のプロフェッショナルとして組織に貢献していくことが前提となるので、私のように初めての国連勤務と言えども、1人の独立した専門家として見られ、知らないから、遅れているからと言って誰かが助けてくれる訳ではないので、分からないところは自主的に解決し、決められた仕事内容を確実にこなしていくことが求められます。一見するとシビアな世界のようにも見えますが、私としては監査人としての専門性を追及するという意味で、健全な仕事環境だと感じています。昨今の国際機関では、予算削減により自分のポジションがある日突然無くなるなどさまざまな状況が起こります。だからこそ、どのような状況下でも人的ネットワークを大事にしながら、常日頃から自分の専門性を磨き、組織に求められる人材になることが必要だと思います。その意味で「差別化」という観点は重要で、監査という軸を確固たるものにすると同時に、私の例で言えば“Data Analytics and Technology”といった差別化要素と言える枝を幾つも身に着けていくことが大切です。唯一無二の存在として組織内での立場を確立するために、常に自分自身をアップデートしてい

かなければいけないので大変ですが、海外で挑戦することのダイナミズムだと感じています。

—海外に行かれる前に準備しておけばよかったことや後悔したことはありますか。あれば、その内容を教えてください。

現在の状況下で必要性を感じるものがあれば今からでも行動することをお勧めします。強いて例を挙げるなら、世界史を勉強しておけば良かったと思っています。高校・大学と理系の道を進んできたので学校教育で世界史を勉強したことがなかったため、日本で定番となっている世界史の書籍を取り寄せ、現在も思い出せば仕事に関連する部分を読み、インターネットで知識の習得に努めています。また、現在世界中で論争となっていることや宗教観の違い、国と国の力関係などは歴史を紐解くことで根本的な部分の理解が進みます。地域間の紛争の原因に対してUNICEFがどうアプローチして子ども達を支援しているのかという活動の背景を知ることができるので、この業界では監査であっても必要な知識だと思います。国際機関を目指す方に対して世界史を勉強して備えておくべきだと主張する気はありませんが、一般教養として世界中の料理やスポーツ、文化など、広く教養を持っておくことで普通の会話でもコミュニケーションが取りやすくなるので助けになると思います。

—英語力の不安が要因となり、海外に行くことを躊躇される会計士の方もいらっしゃいますが、海外赴任前の英語力についてお聞かせいただけますか。また、英語の勉強方法についてもお話しください。

正直、現在も英語力という意味ではネイティブとは程遠く、むしろ国連職員を名乗るのが恥ずかしくなるレベルだと自分では思っています。知識に乏しいトピックでは飛び交う単語すらわからず、発言が求められる際は言葉に詰まることも多くあります。そのため、どのように勉強すれば万全ということは言えませんが、私が意識してやっていたのは、仕事と絡めて語学を学ぶとい

うことです。PwCに在籍時は、1年目から外国人スタッフがいるチームに配属されたため、退所するまで彼らとディスカッションしながら監査を行ったほか、SEC登録企業の担当Teamメンバーに志願し、比較的英語を使って監査をする機会を得ていました。大学院留学時にはPwCでご縁のあった先輩からのご紹介で期末監査の2か月弱、PwCメルボルンで働く経験を積むこともできました。自ら積極的に手を挙げることで比較的英語を使って監査をする機会を得ることができたと思います。また、特に有益だったと思うのは、米国公認会計士資格の取得です。この資格を取得する過程で財務・管理会計や税務・法律・ITなど幅広い分野での英文知識や表現、そして単語をビジネスという観点で知ることができました。こういった知識や業務経験が現在英語を使って仕事する上で基礎になっていることは間違いありません。

UNICEFではいろいろな英語レベルの方が働いています。英語が日本で言うところの“上手”であるに越したことはありませんが、どのような局面においても共通して言えるのは、いかにネイティブのように話すかではなく、何を話すか、議論が実りあるものになるためにどう貢献(input)するかが最重要視される、ということです。これは、日本でも意識して生活することで磨きをかけられると思いますし、海外でのコミュニケーションで役に立ちます。英語に限った話ではなく日本語であったとしても堂々とロジカルに、そして時に情やユーモアも交えながら発言する意気込みが重要です。こうしたマインドセットを大前提として、拙い発音やゆっくりしたスピードの英語でも徐々に磨いていくことで、海外で十分に対応できると思います。

—UNICEFでは、どのようなお仕事をされていますか。

UNICEFは子どもを対象として世界中で「プログラム」と呼ばれる活動を実施しており、私は現在、内部監査人として働いています。このポジションでは、世界中に存在するUNICEFの国事務所に対する内部

監査の実施が主として求められ、それ以外に本部が対象の、または組織横断型のアドバイザー業務のサポートもあります。これまでマレーシアやレバノン、ナイジェリア、中央アフリカ、南スーダンといった国事務所の内部監査に従事してきました。その中でも、各国で実施されているプログラムのインプットとして重要なパートナー組織に対する資金供与や調達業務を中心に、その他にもドナーへの報告プロセスや国事務所の財務・人事・リスク・セキュリティ管理といったプロセスへの内部監査業務を実施しています。監査法人時代の外部による会計監査と比較すると類似点はありますが、決定的な違いとして、内部監査は業務監査に重点を置いているという点があります。これは既存の業務プロセスに対して改善策をクライアントと合意し、実際にそれが導入されるまで追求するという点で、クライアントから独立した立場でプロセスに対して付加価値の追求が期待されていることを意味しています。実例として、ウォークスルーを実施し、いわゆる内部統制3点セットをクライアントと共に作成した上で、統制テストや実証手続を通して発見した不備について単にそれを指摘するだけでなく、発生した根本原因を深く聞き取り調査し、担当者間でのコミュニケーションの問題や担当者が複雑なマニュアル作業を行っているといった要因を識別しました。そのケースでは根本原因に起因して考えられるリスクの重要性をクライアントと共有し、リスク軽減措置の導入までをモニターすることとなりました。

#### 一国際機関で働く面白さややりがいについて教えてください。

一緒に働く同僚と、業務内容です。内部監査を担当する同僚が現在20名弱在籍しているのですが、国籍やバックグラウンドという点でいろいろな方と一緒に働くことができます。日本にいた頃では想像すらできなかったルワンダやウガンダ、ザンビア、コートジボワール、ガーナといったアフリカ出身の人もいれば、欧州、北米、オーストラリア、インド、フィリピン等、世界中の

人材が1つのオフィスに集まっています。そのおかげで各国・地域の雰囲気やトピックを伺い知ることができ、「世界をギュッと縮めたような空間」が体験できます。毎日が本当に新鮮で同僚が持っている知識や経験も様々なバックグラウンドに由来していて興味深いです。例えばPKO、WFPやUNHCRといった類似の国連人道支援機関、国際NGO組織といったパブリックセクターを主として経験してきた同僚もいれば、一般事業会社のCFOや金融機関などのプライベートセクター出身の同僚も混在しています。各々が独自の視点を持ち合わせ一緒になって監査を成功に導く過程は、まさにダイナミズムそのものです。

そして、やはり何と言っても人道支援の最前線を肌で感じながら仕事ができる点は最大のやりがいです。実際に往査する場所として、例えばエボラ出血熱の対応にあたっているコンゴ民主共和国や武装勢力が現在進行形で活動しているナイジェリア北東部等がありますが、実際に足を運ぶことで最前線で活躍しているUNICEFスタッフや笑顔で頑張っている子ども達を見ると、直接的ではないにしろ自身の仕事が過酷な場所で生活している彼ら・彼女らのためになっているということに本当にやりがいを感じます。私が実際、現地視察として訪れた場所にシリアとの国境付近に位置するレバノンのバールベックという場所があります。そこは2011年から始まったシリア内戦により難民として逃れる形で生活をしている子ども達が多くいる場所でもあります。そこでUNICEFから自立支援のサポートを受けている子ども達と直接話す機会がありましたが、難民という言葉とは裏腹に、日本の子ども達と同様に好きなサッカー選手の話をする男の子やアジア人を初めて見たのかスマホで一緒に写真を撮ってと話しかけてくる女の子もいたことが今でも記憶に残っています。

ニュースだけでは伺い知ることのできない実際の現場や逆境下でも笑顔で喜ぶ子ども達の姿を仕事を通じて見られる醍醐味は、国際機関で働く者の冥利に尽きます。



#### 一国際機関で働くにあたり、公認会計士の資格があることの有用性はありますか。

国際機関では、典型的な日系企業とは異なりポジションごとに個別に内定が出ます。会計士に関連して言うと、比較的親和性があるのは監査法人で監査を経験してきた方だと、AccountantやAuditorもしくはFinance/Budget Officerなどのポジションだと思います。そうした求人では、応募条件としてCPAやCAの資格を保有していることが前提となっているものが大半です。それは日本の会計士資格であっても何ら問題はないので、資格を持つこと自体が国際機関でのキャリア形成にとって有用であることは間違いありません。

また、国際機関での求人は、過去の職歴にも細かい指定がされています。Auditorを例として挙げると、「最低XX年以上のAuditの経験、特にBig4での経験を優遇する」といった文面が目立ちます。日本で監査法人での職務経験を積むには、日本の公認会計士試験で論文式試験まで合格することが一般的に求められるので、会計士資格の取得がなければ監査法人での職務経験が得られず、必然的に国際機関での求人要件を満たさないことが想定されます。そのため、公認会計士の資格は最低条件とも言えます。世界的に認知された資





格という点で、公認会計士資格は客観的に候補者の能力を証明できるため、内定の可能性を上げるに足る十分な根拠になると思います。

—今後のビジョンについてお聞かせください。

現在も悩みは尽きませんが、若い頃、とりわけ20代は自分のキャリアについて悩むことが本当に多かったです。どの道に進むことが正解という絶対的な解はないとの信条の下、その都度悩みながら、自分が決めた道で頑張ってきました。最初から国際機関を目指していた訳ではなく、その時々でいろいろな人達に感化され、公私共に様々な経験を積む中で、人道支援が求められるような人達に貢献したいと考えるようになり現在の仕事を通じて夢を実現しています。自分の希望やビジョンは、置かれた状況下で刻一刻と変わっていくものなので、あくまで現時点について話せば、将来は人道支援や開発の現場により近いところで監査という仕事を通して支援が求められる人々に貢献したいと思っています。それを大きな方向性とし、さらに求められる専門性を高めるという視点で、再度Big4などのプロフェッショナルファームや広い意味でプライベートセクターに戻ることも選択肢の1つとして捉えています。国際機関は前述の通り専門家集団であるものの、最先端の監査手法

やその周辺知識・経験がプロフェッショナルファームから生まれていると現在感じています。例えば前述の“Data Analytics and Technology”という部分に関して言えば、監査の文脈で議論する上で、Big4は1つの組織では得られない程の知識と経験を持っており、その他の領域においても監査という視点で話をする上では圧倒的な差があります。土業としての宿命とは思いますが、どのような道を経由したとしても、専門性の追求は終わりがないので、それも選択肢の1つかな、と考えています。

考えや希望は変わっていくので大きな視点を持ちつつも、目の前の仕事や毎日の小さなことに全力を注いでいくことで次のステップや今やるべきことが見えてくるものだと思っています。

—ありがとうございました。最後に、若手公認会計士あるいは公認会計士を目指す学生にメッセージをお願いします。

インタビューをお読みになる方の中には、私のキャリアが、一見すごく綺麗かつ最短距離であるように感じる方もいらっしゃるかもしれませんが、実際は紆余曲折、失敗の連続であり、悔しい思いも何度も経験してきました。それでもめげずに自分の実現したい夢や希望のために、毎日少しずつ小さな努力を積み重ねて来たことが、今に繋がっていると信じています。私も大多数の会計士受験生と同様、無職で資格の学校に通いながら公認会計士資格を取得し、大手監査法人に就職した通り、至って典型的な道からキャリアが始まっています。約10年前に初めて公認会計士としてのキャリアを日本で始めた当時、現在UNICEFで自分のチャレンジしてみたいと思うことができている現実、想像すらしたことがありませんでした。自分がやってみたい、成し遂げたいと本気で思うことに出会った時、周囲の人が揶揄しようが反対しようが、目標に向かって“実際に行動に移す”ことが、ここまで来られたことの原点だと思っています。

今まで仕事面や私生活において大小様々な課題に直面しましたが、その時々

で、目標を立て、それに向かって周囲、特に家族の同意やサポートを得て、実際に小さな努力を毎日積み重ねてきたことが現在の環境を与えてくれたものと確信しています。

やるからにはやり切ったと思えるだけの努力が必要となるので、一念発起して会計士を目指す、または会計士というキャリアを今後の武器にするのであれば、自分が何に対して関心を持ち、どういった道で活躍したいのかを考え、そして何よりそれに向かって“実際に行動に移す”、壁にぶつかっても根気強く前に進むということが、抽象的ではありますが自身を成長させるための重要なポイントだと思います。若いからこそできることや許されることはたくさんあります。是非その特権を利用して、毎日を意欲的に過ごしてください。皆さまのご活躍を本当に期待していますし、どこかでお話しできることを楽しみにしています。

このインタビューは2020年9月、メール等を通じてまとめました。

 **日本公認会計士協会**  
The Japanese Institute of Certified Public Accountants.

〒102-8264 東京都千代田区九段南4-4-1  
TEL:03-3515-1120(代表)  
03-3515-1130(国際グループ)  
<http://www.hp.jicpa.or.jp/>